

市民環境大学OB会 ニュースレター



第15号 2017年7月20日 発行

今年も芽吹き始めた松

OB会活動が日野市の新しい環境拠点“かわせみハウス”で活動開始！！

日野市の環境情報センターがこの4月、黒川清流公園脇に完成し、OB会活動も新たにここを拠点として開始しました。現在、活動内容の内、湧水調査の地点など新しい場所での検討も行われています。また、定例会での輪読も従来の“陸学入門 川と湖を見る・知る・探る”が終了し、新たに太田猛彦著“森林飽和 国土の変貌を考える”が選ばれ、開始されました。今回はOB会副会長の河原さんに新活動拠点での意気込みや“森林飽和”に記された日本古来の海岸林である松について、特に近年問題になっている“松枯れ”について大変興味深い投稿を頂きました。

投稿

新しいテキスト『森林飽和』と日本古来の海岸林である松の“松枯れ”問題について

河原鋒男

4月のOB会が新緑と花に囲まれた黒川公園の近くに新築された『カワセミハウス』で開かれました。小倉先生のもと、現在～将来世代にわたり影響を与える環境問題について学んできた会員が新施設を利用して市民レベルで、何ができるのか、OB会の活動を広く伸ばしていくためには…など会員の共通の意識を深める場としての活用を皆で考えていきたいと思えます。

今回の会合ではいつものようにエポックな話題が多く出ましたが、輪読の本が新しくなったのもその一つで、日本がたどってきた森林の移り変わりや将来展望まで詳しく書かれている本です。難解な点もあるが皆で読み通していきましょう。初回の読みでは東北大震災による松の海岸林被害のことが取り扱われていました。松というと近年「松枯れ」の被害がきかれます。前に読んだ本には松枯れの原因が書いてあったので今回はそれを紹介します。

元々、日本の松にはマツノマダラカミキリ(松の斑ら髪切り:カミキリムシの一種で自由に飛び回る:以下カミキリ)という害虫がいたが、日本の環境では大発生ということにはなかった。'70年代アメリカから輸入された米松材に潜んでいたマツノザイセンチュウ(松の材線虫、以下線虫)という1ミリ位の小さな虫がいて、この材に畜卵したカミキリが線虫を港近くの松林に感染させていった。日本の松には線虫に対する抵抗力が全くないためカミキリを介して全国的に広がっていった。線虫は松の樹脂生成を阻害しマツヤニが出なくなる。健全な松はマツヤニにより傷口をふさいだり病害虫の侵入、水分の蒸散などから身を守っている。マツヤニは人にとっても有用で野球や体操選手が使うロジックパックやバイオリンの弓に塗る滑り止め、香料、医薬品など多方面に使われている。

線虫は羽もなく動きも鈍いが日本在来のカミキリと共生するという驚くべき手で日本の松に取り付く事になったのである。カミキリが松を咬むと線虫も一緒に食われるがカミキリの消化器にちゃっかり棲み付きただかに生きてきた。カミキリが若枝を咬むとそこから線虫も侵入し松を弱らせ枯らしていったのである。

対策として飛ぶことのできるカミキリを農薬で駆除することである程度の効果も出たが昆虫や幼児への影響も重視されて中止されている。松の中には抵抗力のある個体もある様で、永い年月はかかるが松が線虫に対し免疫力を得ることをまわっているようです。

又、本の中で「奇跡の1本松」について書かれていたが、枯れた主原因は砂丘の地下水が津波で塩水に置き換わったためとの事、松の弱さの一面が見えているようです。因みに1本松は樹齢173年、高さ27.5m、胸高径87cmだったとの事。永い年月はかかるでしょうが東北の海岸林の復活を願っています。

OB会メンバー 活動イベントニュース

- ・“かわせみハウス”オープニング記念シンポジウム開催
5月6日(土) テーマ 黒川清流公園の自然
基調講演 矢島 稔 氏
パネルディスカッション 片岡容子氏、金子凱彦氏
中西由美子氏、小太刀智明氏
- ・第3回用水を歩くイベント 6月17日 新町交流センター
- ・日野市職員による浅川水量調査 5月23日 浅川一番橋付近

OB会 輪読報告

新しいテキスト

題名 森林飽和

著者 太田猛彦

4月 前書き

5月 第1章 津波被害の実態

でした。

